



日本平滑筋学会ニュースレター

No.5

2010.11.25

町田市民病院・羽生副院長が第54回大会を主催

さる7月に開催された日本平滑筋学会理事会・評議員会・総会にて、2012年に開催される第54回日本平滑筋学会総会は町田市民病院・羽生副院長のもとで開催されることに決定しました。羽生教授から開催にあたってのメッセージを頂戴しましたので掲載致します。

町田市民病院 副院長、外科部長
東京慈恵会医科大学客員教授
羽生信義

皆様におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、本学会理事長であります佐々木 巖東北大学大学院生体調節外科学教授が主催されました第52回総会におきまして第54回日本平滑筋学会総会の会長を仰せつかりまして誠にありがとうございました。本学会発祥の地・仙台で選出いただきましたことは大変光栄であり、関係各位の先生方に厚くお礼申し上げます。慈恵医大関係といたしましては第11回に大井 実名誉教授(外科学)、第24回に酒井敏夫名誉教授(生理学)、第42回に青木照明教授(外科学)が会長をしており、私が4人目になります。半世紀以上の歴史を持つ本学会のなかで大学教育機関以外の臨床病院の会長は初めてであります。町田市民病院の協力をいただき、東京慈恵会医科大学の大木隆生教授・統括責任者をはじめとしました外科学講座ならびに同門会(慈刀会)のご支援のもと皆様のお世話をさせていただく機会を得ましたことは大きな喜びであります。

これを機にこの10月23日から欧州消化器病週間(UEGW)参加のためバルセロナへ行ってまいりました。スペインには100年前にノーベル賞を受賞したカハール(Cajal)の業績を称えて‘カハール通り’があることを伺い、本郷教授からいただいた地図を頼りに見つけました。‘CARRER DE RAMON Y CAJAL’の初め(写真左)と終わり(写真右)には出生と死亡の場所と年号が記され、当時の華々しさが感じられました。その後幻となったカハール細胞は最近の免疫組織学的染色の進歩により消化管運動のペースメーカーとして再び脚光を浴びてきました。さらにカハール細胞由来腫瘍(gastrointestinal stromal tumor: GIST)も明らかになり、これに対する分子標的治療薬も臨床で使われるようになりました。このように基礎と臨床を包括して生体機能の解明はもとより病態との関連から新たな治療法の開発と大きく突き進むことを目指して今回のテーマを‘統合と進化’にしました。

会期は2012年8月1日(水)~3日(金)で学術集会は東京慈恵会医科大学(東京都港区西新橋)の講堂で開催いたします。8月1日(水)の理事会・評議員会・各種委員会と評議員懇親会は近隣のホテルで行う予定です。特別講演の演者は現在選考中ですが、できるだけ早く決定したいと思います。多数の先生方のご参加と演題のご応募をお待ちしております。



発行所: 日本平滑筋学会事務局
〒980-8574 仙台市青葉区星陵町 1-1
東北大学病院胃腸外科内
TEL: 022-717-7205
FAX: 022-717-7209
E-mail: jsmr-adm@umin.ac.jp
HP: http://www.soc.nii.ac.jp/jsmr
発行責任者: 佐々木 巖
編集者: 高木 都
印刷: 笹氣出版印刷(株)

Contents page

*54回総会は羽生会長で	1
*学会入会のお誘い	1
*52回総会および理事会・評議員会のご報告	2
*平成22年度栗山 照賞を受賞して 鬼頭佳彦	3
*優秀演題賞受賞者に聞く	3
*マスターズ賞を受賞して 高木 都	3
*リレーエッセイ第4回 渡辺 賢	4

日本平滑筋学会入会のお誘い

本会は平滑筋に関わる基礎・臨床研究者が集う日本医学学会所属学会です。英文機関誌 Journal of Smooth Muscle Research は“IF 相当値”が3前後で国際的にも評価されています。学術集会では優秀発表を学会賞として表彰しています。皆様のご入会をお待ち申し上げます(E-mail: jsmr-adm@umin.ac.jp)。

52回日本平滑筋学会総会のご報告

第52回日本平滑筋学会総会が平成22年6月30日(水)～7月2日(金)に、佐々木巖会長のもと、仙台市産業プラザ(アエル)で開催されました。6月30日は理事会、評議員会、各種委員会が行なわれ、7月1日、2日に演題発表が行なわれました。今回の総演題数は55で、シンポジウム1:消化管機能研究におけるstandard and new techniqueが6演題、シンポジウム2:過活動膀胱の基礎と臨床が8演題、シンポジウム3:平滑筋研究におけるシグナル伝達研究のカッティングエッジが7演題、シンポジウム4:炎症と平滑筋(血管、気管、消化管)が5演題、一般演題口演が18演題、一般演題ポスターが11演題、がその内訳でした。7月1日には、シンポジウム1、2の発表が行なわれた他、本郷道夫先生(東北大学)の「消化管機能検査法の進歩/high resolution manometryへの期待」と題した特別講演を拝聴しました。通常の内圧とは異なる、見慣れないカラフルな波形に興味津々でした。また、ランチョンでは、味の素ライフサイエンス研究所の鳥居邦夫先生から、「うま味の生理学的役割-口腔(味覚)、消化管(内蔵感覚)そして脳機能-」についてのご講演がありました。午後にはポスターの討論と一般演題口演が行なわれました。ポスターセッションでは、ポスターを目の前にしての議論が白熱し、予定していた60分の討論時間では足りない印象でした。初日の夕方に、会場近くの江陽グランドホテルで全員懇親会が開催されました。海外からのお客様も迎え、仙台名物の牛タンもその場で焼いてふるまわれ、会員相互の懇親を深め合うには格好の場となりました。宮城県の地酒が大量に余ったのが気になりました。2日目は残りのシンポジウムと一般演題口演の発表がありました。また、ランチョンとして福土審先生(東北大学)から「消化管内腔の酸と消化器症状」と題した興味深いご講演がありました。4つの栗山賞受賞講演で演題発表を締めくくった後、今回の総会の発表演題の中から優秀演題賞3題(臨床系、基礎系、漢方系、から1演題ずつ)の発表、表彰がありました(p.3参照)。演題発表数(特別講演、栗山賞受賞講演、を除く)は第48回の岡山で69、第50回の弘前で73、昨年第51回の名古屋で56、今回が55と昨年あたりから演題数が減少しております。基礎系と臨床系に分けて検討すると、26:43(第48回)、36:37(第50回)、38:18(第51回)、27:28(今回)という分布になっており、特に臨床系の発表演題数の減少が目立つ印象です。来年は東京での開催となりますが、特に臨床系の演題が多数集まることを期待しております。

(文責:第52回日本平滑筋学会実務担当、柴田 近)

理事会・評議員会報告

第52回日本平滑筋学会総会の理事会、評議員会が6月30日に仙台市産業プラザ(アエル)で行なわれました。学会事務局から平成21年度庶務報告として、個人会員数(457名)、学会誌発行状況、ニュースレター発行状況、物故会員、について説明がありました。会員数は昨年度に比べ8名増加と微増で、会費納入率は平成20、21年度共に約70%であると説明がありました。財務報告として平成21年度の予算・決算、平成22年度予算案の説明があり、承認されました。次いで、編集委員会報告、平成21年度ベストダウンロード賞報告が鈴木編集委員長から、広報委員会報告が高木委員長からありました。また、第52回総会で、基礎系、臨床系、漢方の3分野から1演題ずつ優秀演題を選考する旨の報告が本郷選考委員長からありました。平成22年度の栗山熙賞の選考結果として、鬼頭佳彦(名古屋市立大学)、Eun Bok Baek(韓国)の両先生を受賞者と決定した旨、鈴木選考委員長より報告があり承認されました。名誉会員に桂木猛(福岡大学)、福西茂二(福西胃腸科外科)、本間信治(前新潟大学)の各先生、特別会員に佐治重豊(がん集学的治療研究財団)、坂登光夫(全薬工業)の各先生が推戴されました。また、新評議員として、小林恒雄(星薬科大学)、佐藤研(弘前大学)、眞部紀明(川崎医科大学)の各先生が承認されました。次期会長鎌田勝雄先生(星薬科大学)からは、第53回日本平滑筋学会総会を平成23年8月2日～4日「東京都ゆうぼう」とで開催予定の旨、報告がありました。第53回総会副会長として羽生信義先生(町田市民病院)が選出、承認されました。栗山熙賞受賞者選考に関して、鈴木光委員長、尾崎博、鎌田勝雄、高木都の各委員が第1期任期満了のため選挙が行なわれ、全員が再任されました。東原正明先生(評議員)より日本平滑筋学会から1冊1万円程度の教科書を発行する案が提案され、議論の後、理事長から教科書作成編集準備委員会を立ち上げ、発行の是非を含めて来春までに結論を出す提案があり、了承されました。委員指名については、後ほど理事長から連絡することとなりました。また、日本平滑筋学会の財務状況の見通しについても話し合われました。柴田事務局長より、平成16年度決算時にあった約1000万円の次年度繰越金その後年毎に減少し、平成21年度決算では500万円弱にまで減少していることの説明がありました。その原因として、収入面での会費収入減少、支出面での会誌印刷費、があげられます。平成20年度からはツムラ(株)からの年間300万円の寄附があるために次年度繰越金が極端に減少せずすんでいます。この寄附も平成22年で終了するため、それ以降は次年度繰越金の急激な減少が予想されます。現在の支出をみると、学会誌発行費用が財政負担をかけているのは明らかです。会誌の発行回数を減らす(現行は年間5回)、あるいは電子ジャーナルのみとして印刷は一切行わない、などの変更を行った際の見積もり、それに伴う支出の減額について事務局で検討し、理事会・評議員会で報告しました。会誌の発行回数を年2回に減らしても支出削減額は年間50万円以下にしかならないこと、電子ジャーナルのみとすればかなりの支出削減が見込めることが分かりました。これについて理事会、評議員会では、見積もりは複数の印刷会社からも取るべき、会費収入を増やすようにすべき、との意見が出されました。上述のごとく、会員数はここ数年大幅な変動はなく、会費納入率を100%近くまで上げても増収は年間80万円程度しか見込めないのが現状です。何らかの方法で学会誌発行費用の大幅な削減を行なうことが財政健全化へ向けて必要と思われました。

(文責:日本平滑筋学会事務局、柴田 近)

平成 22 年度栗山熙賞を受賞して 鬼頭佳彦(名古屋市立大学医学部生理学教室)

この度は、2010 年度栗山熙賞に選出していただき、ありがとうございます。私は名市大薬学部薬品作用学教室出身でして、当時、今泉祐治先生が教室セミナーなどで学生に「君ねえ、そんなんじゃダメだよ！！栗山先生のところじゃねえ・・・」とおっしゃるのを何度も耳にし、「九大薬理には栗山先生というすごい先生がいっちゃうんだ！」と思ったものでした。その後、鈴木光先生の教室に御厄介になり、栗山先生が実はかなり怖い先生だったということを知りました。ご自身が(かつて江橋先生が「まさに名人芸」とおっしゃったほどの)微小電極法の名人でいらっしゃったからなのでしょうが、電極が刺さらずなかなかデータが取れないときなどは「データが取れんような奴は、その窓から飛び降りて○ネ」と叱られることもしばしばだったとか。一方、鈴木先生は仏様のように優しい先生でして、どうしてもデータが取れない日などは「鬼頭君、晴れる日もあれば雨の日もあるよ」とよく慰めてくださったものでした。今回の授賞の対象となりました仕事は本当になかなかデータが取れない実験でしたので、毎日怒られていたらどこかで挫けていたことでしょう。ですから、この論文を完成させることができましたのは、拙い私を見守ってくださった鈴木先生のおかげであります。本当にありがとうございました。今後も、目先のことに囚われず、牛歩になってもしっかりとがんばっていきたくて思っております。

(2010 年度栗山 熙賞を受賞され、第 52 回大会で受賞講演をされた鬼頭先生に、受賞の感想をご執筆いただきました:編集部)

最優秀演題賞受賞者に聞く

第 52 回総会の再優秀演題賞に選ばれた 3 名の方に喜びの声と今後の抱負を伺いました。

◎優秀演題賞をいただき大変光栄に存じております。大学院入学から 3 年間、カベオラを基盤とした血管平滑筋におけるイオンチャネル複合体について研究してきました。今回の受賞を励みとして、今後も全反射蛍光(TIRF)顕微鏡による 1 分子可視化法を用いて平滑筋研究の更なる発展に貢献できるよう精進します(名古屋市立大学大学院薬学研究科 細胞分子薬効解析学分野、鈴木良明先生)。

◎この度、第 52 回日本平滑筋学会総会において優秀演題賞を受賞でき大変うれしく思っています。総会会長佐々木巖先生をはじめ、関係諸先生には厚く御礼申し上げます。私は、現在まで国内外で 8 年間平滑筋基礎研究に、そして 8 年間は消化器内科臨床に携わってきました。私は、今までの経験から、今回学会のメインテーマであった基礎と臨床のコラボレーションという点に大変興味を持っております。私は、まだまだ臨床も研究も未熟ものですが、今回の受賞を励みにして、頑張っていく所存であります。今後ともご指導のほどをよろしくお願い申し上げます(北九州市立医療センター・消化器外科、伊原 栄吉先生)。

◎伝統ある日本平滑筋学会から、このような素晴らしい賞を頂いたことを厚く御礼致します。今後も優秀な指導者のもとで益々の研鑽に励み、大建中湯の作用機序の解明、ならびに基礎から臨床への応用に向けて尽力したいと思います(東北大学生体調節外科・菊池大介先生)。

消化器学における第 16 回マスターズ賞 (Masters Award in Gastroenterology)を受賞して

奈良県立医科大学生理学第二講座 高木 都

アメリカ、ルイジアナ州、ニューオーリンズで 2010.5.1- 5.5 まで開催された DDW 2010 におけるアメリカ消化器学会(AGA)で第 16 回マスターズ賞を受賞しました。この賞は、消化器科学における基礎医学的または臨床医学的研究において優れた業績をあげた事が認められて与えられるものです。今回選ばれた世界の受賞者の中で、日本人の受賞者は私 1 人でしたが、大先輩の伊藤漸先生、鹿児島大学乾明夫先生、東北大学福土審先生に続いて 4 人目の受賞です。これまでの受賞者は、全員、日本平滑筋学会と縁のある研究者です。賞金は高木 都本人と奈良県立医科大学に半分ずつ授与されました。

私をこれまでサポートして頂いた日本平滑筋学会の皆様には謝意を表すると共に、共同研究者の方々に心から感謝いたします。授与式は AGA 会期中の 5.3 にニューオーリンズで行われましたが、私は参加できませんでした。来年のシカゴの AGA には教室の若い研究者達と新しい研究成果を発表しに参加したいと思っています。下にクリスタルメントの写真を掲載します。クリスタルメントには、Miyako Takaki Ph.D.と彫ってあるのがご覧頂けるでしょうか？ 実物はとてもきれいです。一度見に来て下さい。



リレーエッセイ第4回 「噛めば噛むほど味が出る？」

首都大学東京・人間健康科学研究科 渡辺 賢

近頃、もつ焼きにはまっています。新しい職場から歩いて10分くらいのもつ焼き屋へ、大学の新しい飲み仲間誘われて行ったのがきっかけです。東京でも有数、との評価もあるその〇田(町屋にあります)は、旨くて安くて店もきれい、特に軟骨や砂肝は絶品ではまっています。更に最近、地元のもつ焼き屋が閉店時間を遅くしてくれたため、仕事帰りに寄ることが可能になり、いよいよもつ焼き狂いです。

もつ焼きのうまさは、噛めば噛むほど旨みや甘みが出てくることだと思います。ムネやモモ、またハラミ、といった骨格系が口に入れて噛んだ瞬間、旨みが口の中にぱっと広がるのに対して、シロ、ガツ、軟骨といった平滑筋系はすぐには味が出ず、咀嚼することによって味が出る、この間も地元でシロを味わいながらこんな幸せを感じていたのですが、その時ふと、平滑筋研究も全く同じだと気がきました。華やかなXXX研究(好きな言葉を入れてください)のように、誰もが瞬間的にインパクトを感じるというよりは、一見訳がわからなさそうだけど、知れば知るほど面白くなっていくという奥の深さ、それが平滑筋研究の面白さでないかと思ったわけです。

ただ、もつ焼きもそうですが、平滑筋研究もつつきやすくはないかもしれません。実際、なんとなくこの頃総会してみる(そしてそのあと飲みに行く)面々が固定しているような気がします。とすれば、噛んだ瞬間に旨みを感じさせるような(もしくはそう錯覚させるような)工夫も少しは必要かもしれません。一回面白いと思ってくれば、きっと噛めば噛むほどにじみ出てくる研究の面白さがわかってくれるでしょう。そうなれば、この学会はきつともつともつと素敵になるのではないかと、思います。

ではそのためにどのような工夫(素材?調味料?)が必要か、といわれるとなかなか案が浮かびません。悩んでいるうちにどんどん食べて空いた串の数が増えました。「まずあんたがすべきなのはこんなところで酔っ払ってなんかいないで、ニュースレターをもっと魅力的な紙面にすることだ」と広報委員長の天の声がどこからか聞こえてきそうなので、もうここで注文するのはやめてお開きにしておきます。

もつともまずは自分の研究をもっと魅力的にしなければ。噛んでも噛んでも味が出ないしょうもない研究、では困りますからね。

栗山 熙賞 締め切り迫る!

平成23年度栗山熙賞の締め切りは本年12月31日(消印有効)ですので、応募ご希望の方はご注意ください。詳細な応募条件ならびに必要書類につきましては日本平滑筋学会ホームページ(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsmr/index.html>)をご覧ください。

栗山熙賞の応募資格は40歳未満の平滑筋研究者であり、受賞副賞は10万円です。若手研究者の積極的な応募を期待いたします。

会員訃報

謹んでお悔やみ申し上げます。

中畑則道先生

東北大学大学院薬学研究科教授
(2010/10/27)